



Bangladesh・里親プロジェクト活動レポート

遠藤磨祐

年末の現地入り

バンコクからダッカ行きの飛行機に搭乗したのが12月28日。到着前の機内から見下ろしたダッカの街は厚いスモッグに覆われ、様子を見ることすらできませんでした。

北海道の1.7倍ほどの国土に、1億7000万人もの人々が住む Bangladesh。人口密度の高さも世界有数です。

いつもの事ながら入国は大変でした。長い列を並び、ようやく順番が来ても質問には厳しいものがありました。

昨年の7月にダッカのレストランで起きたテロ事件も関係しているのかも知れない、と思いました。

この事件では、NGO 関連の方を含めて外国人が28人（内、日本人が7人）犠牲になったのです。

ようやく入国スタンプが押され、ホッする間も無く、国内線に向かって急ぎます。いつも国内線は遅れるのですが、予定では間に合うギリギリの時間なのです。

以前は、飛ぶかどうかすら信頼性がない国内線だったので、現地まで12時間かけて全力疾走する車に乗っていました。

満面の笑みで迎えてくれたラジヨーさん

さて、国内線で飛ぶこと小一時間、Cox'bazar（コックス・バザール）の空港では、満面の笑みを湛えるラジヨーさんと、子供たちが出迎えてくれました。



<国内線で行けるようになりました>



<空港のラジョーさん>

*ラジョーさん・・・NPO アースキャラバン・ Bangladesh 事務所の
所長さん。日本にも7年間住んだことあり日本語話せます。家は代々
の篤志家。お祖父さんはお寺の土地を丸ごと寄進したそうです。

ラジョーさんや2人の子供たちとは、1年ぶりの再会です。
そしてみんなで乗ったのは、いつの生産かも不明な年代物のオープンカ
ー。（残念ながら、ラジョーさんの後ろに写っている車ではなかったで
す）

車は、人や人力車で溢れるコックスバザールの混沌とした街中を抜けて
行きます。

やがて、ラジョー一家に到着。まずは、荷物を降ろします。



<コックスバザールの路地>



<近所の果物売りのおばさん>



<ラジャー・ゲストハウスの部屋>



<朝ご飯>



<路上の八百屋さん>



<ラジョー一家>



<ラジョー家前の魚屋さん>

ここで、“ああ、しんど〜！”と、寝っ転がりたいところですが、時間を無駄にはできません。

ラジョーさんとすぐにミーティングを始めます。
滞在中にすることや、これからのことなどを打合せたあと、仏舎利塔公園に向かいます。

仏舎利塔に向かう

この仏舎利塔群のある丘は、バングラデシュ少数民族仏教徒の精神的な象徴であるにも関わらず、かつては悲惨な状態でした。

仏教に敬意を払わない貧しいベンガル人たちは、仏舎利塔の周囲に自宅小屋を不法建築したりしました。その結果、崖崩れを起こして倒れた塔もありました。

また、仏舎利塔に落書きしたり、汚物で汚れたりもありました。ゴミが至る所に落ちていて、とても聖地とは呼べない状態でした。

その仏舎利塔群の丘の悲惨な状態をラジョーさんに見せられた私たちの胸は痛みました。

この時、ヨーロッパや北米のメンバーも来ていたので、みんなで相談しました。そして私たちはまず、ラカイン人の大学生たちにも声をかけて、仏舎利塔群丘の掃除から始めたのです。

そうして毎年、少しずつ仏舎利塔を聖地として復興して行きました。
そして今では、聖地公園としての看板を掲げるまでになりました。

今、NPO アースキャラバンで雇っている二人のおじさん達が毎日掃除し、たくさんの木や花を植え、水やりをして下さっています。

これまで、花は山羊が食べてしまったり、人に盗られてしまいました。
これでは、綺麗な値打ちものの花は咲かせられません。

でも、聖地公園のフェンスをもっとしっかりすることにして、今後は花を販売できるようにすることになりました。花を育てることの好きなおじさんは大喜びです。

さらにパラソルにテーブルや椅子なども置いて、アウトドアの喫茶休憩所も設置の予定となりました。

聖地公園の完成までには、まだまだお金がかかります。でも、ラカインの人たちの精神的な支柱も大切にしなければなりません。

こうしてみなさんのお陰で、今やこの仏舎利塔群の丘は綺麗に整備され、コックスバザールの街のどこよりも空気が澄んでいます。まさに聖地公園と呼ぶにふさわしいところになって来たのです。

ゴミがないことって、これってバングラデシュではとても驚きなんですよね。おじさんたちにも感謝です！







<NPO アースキャラバン・仏舎利塔復興係のおじさんたち>



<入り口には看板も！>

支援の難しさを感じる時

ところで、ラジヨーさんから、とてもショックな話を聞きました。
NPO アースキャラバンで支援している所の1つに、チョドリバラという村がありました。（ラジヨーさんの奥さんの出身地です）

この村で、責任者とお坊さんとの間で深刻な問題が生じてしまい、今や訪問どころでは無くなってしまった、そうなんです。

まず、学校が併設されている僧侶の中で意見が食い違い、どちらの僧侶に加担するかで村のリーダー達の間で意見が分かれ、にっちもさっちも行かなくなって、NPO アースキャラバンが支援して来た学校が閉鎖になってしまったとのことでした。

もっと前に問題を收拾をつけることができたなら、学校閉鎖にならずにすんだのに、、、。私たちは、里親の皆様にお詫びの言いようもありません、、、。遠く離れている地を支援することの難しさを感じました。

新しい支援先の村へ

それでも支援は続けなければなりません。
気を取り直した私たちは、翌日、車で2時間離れたバルバキア村を訪問しました。

ここでは5名の里子さん達と再会。
学校に集まった子供たちに話をしました。

そしてラジヨーさんの通訳で、里子たち1人1人に、里親さんからの手紙を読んで聞かせ、手渡しすることができました。

“日本のお父さん、お母さん、兄弟姉妹が応援しているので、勉強頑張っ
てね”と伝えました。

新しい里子さん3名とも会えました！
みんな目がキラキラしています。

その後、50分ぐらい離れたマニプー村に向かいます。
ここは、今年から新しい学校をオープンです！
新しい里子さんは3名。

翌日は、1年目から支援して来たクルスクル村です。
ラジョーさんの家から、自動三輪ミゼット車で揺られること40分。

この学校に里子は5名いたのですが、お坊さんになって出て行ってしまった里子さん、家の事情で山に帰らざるを得ず、学校を辞めてしまった里子さんなどもいて、今回は1名しか会えませんでした。

学校の方は勉強を続けることを勧めても、家の事情では仕方ありません。残念ですが、バングラデシュでは、こういうことがよく起こります、、、。

でも今回会えた里子のセンセンちゃんは、見ごと試験に合格！ 無事中学校に入ることになりました。



<村を巡る私たちを乗せて走る三輪ミゼット>



<村に到着して>



<里子さんたち>



<面談に最初は緊張の面持ちのセンセンちゃんでした>



<里親さんからの手紙はやはり嬉しそうです>



<校長先生はお坊さん>

やる気があるチョフロンギ村の先生

先生や子供たちに別れを告げ、20分離れたチョフロンギ村に向かいました。

着く早々、村長さんからは、学校のトタン屋根を修理するのに\$1000かかるから出してもらいたい、と言われてしまいました。

しかし皆さんの支援金ですから、“はい、そうですね”と簡単に出すわけにはいきません。みんなで相談します、とだけ答えました。

現在は、お寺の下を教室にしているとのことで、後日、ラジョーさん宅で先生と会って相談したら、お寺の下での授業で問題ない、とのことでこの件は却下してもらいました。（先生は大学生でしたが、とてもやる気のある良い人でした）

チョフロンギ村では、7名の里子さんにお会いしました。

遊びに行っていて会えなかった里子さんもいましたが、みんな一生懸命勉強している様子でした！



<子供たち>



<新しい里子さん>



<里子さんたちのその後を確認しています>



<里子さんたちの真剣な眼差し>



<手紙を受け取って、嬉しそう>

皆さまに感謝！

こうして駆け足で4村を周り、新しい里子さんとも会うことが出来ました。

事情があって辞めてしまった里子さんのことは残念でしたが、これから育ってくれる里子さん達に会えたのは、とても嬉しい事でした。どの村のどの里子さんも、皆さんの支援を心より感謝し、そして心の支えにしている様子が見えました。

今回感じたのは、10年近く続けて来た結果、支援の基礎が段々と固まって来たように思う事です。

皆様のご支援が、どれ程僻地の山奥の貧しい子供達の支えになるかと思うと、感謝に絶えません。ただ、“ありがとうございます”の一言に尽きます。

バングラデシュの子供たちへのご支援下さる里親の皆さまへの感謝の気持ちとして、現地で購入したショールをお礼にお届けしたいと思います。

またショールなどは、なるべく早くラカインのご婦人たちが生産するものをお届けするシステムが出来るように頑張りたいと思います。

以上、かんたんなバングラデシュレポートでした。
現地からの想いが皆様の元に届きますように。

2017年 1月2日

Cox'bazar（コックスバザール）にて感謝を込めて



<女性たちが現地で生産できるものについてのミーティング>



<夕方のコックスバザール路地>



<ラジヨーさんの娘さんと近所のおもちゃ屋さんで買い物！>